

# パリ・ロジエ通り界限

## ー 浸透するユダヤ的差異 ー

田所 光男

### はじめに

パリの通りには、シャンゼリゼのように世界中にその名を知られたものもあるが、本稿が取り上げるロジエ通りは、市販のガイドブックにはほとんど登場することのない通りである。それでも、詳細さで際立つミシュランの観光ガイドシリーズの中の一冊『パリ』には数行の記載があり、「ユダヤ人地区」と紹介されている (Michelin 97)。実際、ここはパリの中で比較的多くユダヤ人が住んでいる地区である。このロジエ通り界限を歩きながら、シナゴークを訪れ、レストランに入り、建物の壁にはめ込まれたプレートなどを見上げ、また本屋の高い書棚からこの通り名をタイトルに含んだ小説やエッセイを選んで読んだりしてみると、ルーブル美術館やエッフェル塔、ファッションやワインでもっぱらできているように見えるパリやフランス、あるいは、近現代の世界文明を牽引してきたように見えるリベラルで理性的なフランスや西欧、こういう見慣れた姿が、これまでとは違ったように見えてくる。光の都市 と呼ばれるパリの一角にある、このユダヤ的界限に足をとめるならば、ヨーロッパ文明のまばゆいばかりの輝きに目をくらまされることなく、その文明の功罪を冷静に検討できるかもしれない。

まず、可視的な都市空間を進んでみよう。次いで、この界限に堆積するいくつかの歴史の層に降り、そして最後に、この地区を主要な舞台とする文学作品を読んでみよう。ユダヤ的差異が浸透する、地理的、歴史的、虚構的三空間をこのように経巡ることで、単なる街の風景ではなく、記憶と想像が練り合わさ

れた光景、いわば、ロジエ通り界隈の情景を把握することができるであろう。

## 1 ロジエ通り界隈へ

パリは20の区が渦巻状に配置されている。ロジエ通り界隈は、セーヌの右岸4区にある。二つの観光名所、パリ市役所とバスチーユ広場を直線で結んだ線の北側に広がる地区であり、またたくさんの観光客を集めるポンピドー・センターからも遠くはない。ここは行政上のまとまりではないので呼称も様々で、「ロジエ通り界隈」Le quartier de la rue des Rosiersとか、「マレ地区」Le quartier du Marais、「聖パウロ街」Le quartier Saint-Paul などと呼ばれている。



この地区を訪れるために便利なのは、地下鉄1号線の聖パウロ駅である。1号線は、セーヌ川の北側を走ってパリを東西に結んでいる線であり、シャンゼリゼやルーブル美術館の近くで、この線の、バスチーユ広場方向に向かう電車に乗ると、ほどなくして聖パウロ駅に着く。地上に出てみれば、そこは大通りの中の島のようなところで、夏には涼しげな緑陰

があり、メリーゴーラウンドが来ていることもある。

ロジエ通り Rue des Rosiers は、ここから北に、二、三分歩いたところに、細長くくねっている(写真上)。西に行くほど狭くなり、買い物客が駐車したたった一台の車両が完全に往来をふさいでしまい、言い争いの光景に出会うことも珍しくはない。通りの名前は訳せば、「バラの木通り」。この名前は13世紀初頭にまでさかのぼると言われ、名前の由来の説明としてはいろいろな説があるが、もともこのあたりが、パリの都市城壁の外にある田園、花咲く小道であったところからついた名前のようなのである(Brody 69)。

この東西に走るロジエ通りに、南から垂直にぶつかる小さな通りがフェルディナン＝デュヴァル通り Rue Ferdinand-Duval(写真右)。ここは古くから



「ユダヤ人通り」Rue des Juifs と呼ばれてきた。しかし 19 世紀末、ユダヤ人ゆえの冤罪事件であるドレフュス事件の渦中、ここにはその通りの名前のために、反ユダヤ主義者が憎しみを吐き出しにやってきた。これを逃れるため、住民は通りの名前の変更を要望し、1900 年、当時のセーヌ県知事の名前をとって、現在の通り名となった ([www.tempo.fr/ruedesrosiers](http://www.tempo.fr/ruedesrosiers))。

このフェルディナン＝デュヴァル通りに平行して、同じくロジエ通りに垂直にぶつかるのがエクッフ通り Rue des Ecouffes である（写真右）。「エクッフ」というのは、仏和辞典にも、フランス人が現在ふつうに使っているフランス語の大きな辞書にも出ていない古い言葉で、猛禽の一種を指す。昔、ここには高利貸しの店がたくさんあって、猛禽にたとえら



れるあこぎな商売をやっていたらしく、そこからつけられた名前とのことである (Brody 70)。いずれにしても、高利貸しを営み、生き血を吸うと嫌われていたのは、他ならぬユダヤ人であった。

また、パリの中心部を貫くりボリ通りが聖アントワーヌ通りと名前を変えるあたり、ちょうど地下鉄の聖パウロ駅が地上に開くところは、1900 年、パリに地下鉄が開通した時点では、「ユダヤ人広場」と呼ばれていた。（図左下、*Images de la mémoire juive* 50）

「ユダヤ人広場」や「ユダヤ人通り」、それに、ユダヤ人高利貸しに関わる名前、この界限は確かにユダヤ人と結びついてきたわけである。しかし重要なことは、むしろ、そういうユダヤ的な差異が現在では見えなくなったということ



のほうである。通りや広場の名前から、「ユダヤ人」というそのものズバリの言葉も消され、「エクッフ」という語の意味も忘れられたこと、このことは、この界限を訪れる時に受ける視覚的な印象、すなわち、他のパリの町並み風景となんら変わらない、

という印象とよく合致する。

本稿のはじめで、ここはユダヤ人が比較的多く住む地区だと述べたとき、ゲットーという言葉や、あるいは、日本にもある中華街を連想された方も少なくないであろう。確かに、この界隈を呼ぶのにゲットーという言葉がよく使われ、1930年代のレオン＝ポール・ファルグも、2000年代のドミニック・ザルディも「パリのゲットー」(Fargue 95 ; Zardi 80)と呼んでいる。ゲットーはふつう1516年のヴェネチアが起源とされるが、実際にはそれよりもさらに一世紀前の1413年、スペインのバリャドリッドで史上はじめて、ユダヤ教徒の居住区が牢獄の様相を呈した(ドリュモー 547)。ロジエ通りを含めてパリには、この都市内監獄という固有の意味でのゲットーは存在したことはない(Bismuth-Jarrassé et Jarrassé 221)。またここは、横浜などの中華街のように、巨大な朱塗りの門があって、ここから別世界に足を踏み入れるということを可視的に教えてくれる指標があるわけでもない。小さいパリの街は、元気な人にはメトロに乗らずに歩いて回ることが可能であるが、この界隈は、はじめて訪れた人が、そのようにずんずん歩いていると通り過ぎてしまいそうなほど、どうという特色もないパリの一角である。決してユダヤ人ばかりが住み、ユダヤ的差異ばかりが表出されているわけでもない。日の丸を出したすし屋にさえ出会う。

## 2 ユダヤ的なものの露頭

ここの差異に気がつくには、歩くスピードを少し落とす必要がある。時には立ち止まったりしてみると、パリのほかのところではあまり見られないものが



露頭しているのがわかってくる。

まず、シナゴーグがある。パリの街にはあちらこちらにキリスト教会があるが、ノートル・ダム・ド・パリのような巨大なゴシック建築に限らず、多くのキリ



スト教会に比べて、シナゴグは目立つものではない。聖パウロ駅からすぐ近くの、パヴェ通り<sup>1)</sup>にある、この界限で最大のシナゴグ(写真前頁)は現在見学不可となっているが、儀式を行っていない時には、頼めば入れてくれる。ユダヤ教は偶像崇拜の禁止という戒律を厳格に守っているので、キリスト教会とは異なり、シナゴグの中には絵も彫像もない。

本屋が何軒もある。ユダヤ文化に関わる書籍、ユダヤ・コミュニティ向けの新聞・雑誌、それにユダヤ教の儀礼に関わる祭具などを買うことができる。並んでいる本の中には、フランス語でない言葉も見られる。それどころか、アルファベットでない文字もある。ヘブライ文字である。また、八月末には新年用のグリーティング・カードが何種類も置いてある。フランスでは夏から売り出すというわけではなく、ここだけのことで、ユダヤ教の新年は九月に来るからである。

ロジエ通りとフェルディナン・デュヴァル通りの角に、レストラン「ジョー・ゴールデンベール」がある。イスラエルの国旗にも使われているダヴィデの星が二つ、入り口の上に見える。その下には、新聞の切抜きのようなものが貼ってあり、立ち止まって読んでいる人もいる。1982年



8月9日、ここがテロ攻撃を受け、<sup>2)</sup>当時の共和国大統領、フランソワ・ミッテランが休暇中にも関わらず、急遽駆けつけたことなどが書かれている。テーブルに置いてあるメニューを開けると、フランス料理もなくはないが、ロシアを中心とした東ヨーロッパの料理名が並んでいる。

ここの界限はユダヤ教の祭日の前日に混雑する。ユダヤ教の慣例に則った食材や、伝統的な食品を求めて、パリのほかの地区はもちろん、郊外からも人がやってくる。ユダヤ教では、食物に対する禁制が強く、例えば、豚肉類はハムも含めて食べない。また他の肉類でも、規定に合致した畜殺によるものが求められ、ユダヤ人は特別な肉屋を必要とする。

日本とは異なり、ふつうフランスでは日曜日にはレストランや喫茶店、映画館を除けば、ほとんどの店が閉まっている。キリスト教の安息日である。教会に通う人の数は多くはないが、社会の制度・慣習としてキリスト教はこのよう

に深く根を下ろしている。これに対し、ユダヤ教の安息日は土曜日で、ユダヤ人は一切の仕事を休む。こうしてこのロジエ通りの特殊な光景が顕われることになる。パリのほかの地区では、買い物客でごった返している土曜日、ここは人気がなく、他の界隈が静かな日曜日、ここでは買い物ができるのである。

以上、この界隈に足を踏み入れると見えてくる、その特殊性、つまりユダヤ的な特色を拾い上げてきたが、ロジエ通り界隈は、パリの町全体の時間と空間の中に、こうしたユダヤ的な差異をさほどきわだたせずに表出しているのである。そしてここを訪れることでまず視覚的に観察されるこの差異の表出の仕方は、ユダヤ人が、ヨーロッパ、とりわけフランスで生きてきた歴史に深く結びついている。

### 3 差別から同化へ

この地区に堆積する歴史に入り込むための入り口は、この界隈の至るところに開いている。ここでは、ロジエ通りとフェルディナン・デュヴァル通りの角に立っている案内板から掘り進んでみたい。これはパリ市によって立てられた歴史案内板である。

〔パリの歴史：プレッツル〕1881年以降、アシュケナジム・ユダヤ人は迫害を逃れてフランスに押し寄せ始め、パリ、特にマレ地区に定着していた同宗者のところに身を落ち着けた。1900年には、およそ6,000人がルーマニア、ロシア、オーストリア・ハンガリーから到着した。1914年までに、さらに13,000人がやって来た。エクップ通り、フェルディナン・デュヴァル通り(…)、ロジエ通りに大挙して入り込み、そこに「プレッツル」、イディッシュ語で言う「小広場」



<sup>3)</sup> を作り、ロジエ通り4番地2号にはイスラエリット職業学校を建設した。このコミュニティ生活はロジェ・イコールの『混ざった水』の中に描かれている。半分以上の住民がナチの強制収容所で殺害された。

この界限がユダヤ人の歴史の舞台となり、ユダヤ人の文学の対象ともなったことがはっきり出ている。しかも、そのユダヤ人とは、とりわけ、パリにやってきた移民であり、ここがパリの中にありながら、東ヨーロッパときわめて強く結びつく地区であることを教えてくれる。

ヨーロッパとユダヤ人の歴史は長く、よじれている。かなりよく知られているように、ユダヤ人は中世を通じて差別と排除の対象であり、多くの場合、土地所有も許されず、また手工業の組合からも締め出されて、金貸し業や商業に従事するほかはなかった。そしてそれには宗教的理由が大きく、ユダヤ人はキリスト殺し、つまり神殺しの汚名を着せられて迫害されたのである。他の西欧諸国の君主と同様、フランス国王もユダヤ人のお金を利用する一方で、ユダヤ人追放令をたびたび出し、シャルル6世時代の1394年、ユダヤ人追放が確定している。しかしそれでも1789年の革命の時点では、フランス全体では40,000人のユダヤ人がいたと推定されている。そのうち25,000人は、ドイツとの国境地域アルザス・ロレーヌ地方にいて、その他は、南フランスのアヴィニオン周辺で法王の庇護下にあったユダヤ人、及び、スペイン国境に近いボルドーとバイヨンヌのユダヤ人である (Hyman 371-372)。これが、フランスにおけるユダヤ人の伝統的配置である。パリには500人ほどのユダヤ人しか残っていない (Philippe 140)。

あの世界史上名高いバスチーユ襲撃の時、だから確かにユダヤ人はパリにいたわけである。そのユダヤ人たちは、いったいあの革命過程の中でどのような動きをしたのであろうか。すべての人間の自由と平等を謳い、圧制政府を転覆する権利、いわゆる抵抗権まで入れた人権宣言が、バスチーユ奪取からほぼ一ヵ月後の8月26日に採択された。同じ日、パリのユダヤ人は、自分たちの差別的状態の撤廃を求め、国民議会に市民権賦与を請願した。これにアルザスのユダヤ人が続いた。このユダヤ人問題は国民議会の議事にのぼり、クレルモン＝トネルによる有名な演説がなされる。

統一体という意味でネーションであるユダヤ人にはすべてを拒否し、個人としてのユダヤ人にはすべてを与えなければならない(・・・)。ユダヤ人は国家の内部において、政体も団体もつくり、個人個人が市民でなければならない。<sup>4)</sup>

この提案の方向に、いわゆるユダヤ人「解放」が行なわれ、1790年1月、ポ

ルトガル系ユダヤ人に始まって、1791年9月には、フランス全土のユダヤ人が完全な権利をもった市民として法的に保障された。当時フランス以外のどこの国でも、ユダヤ人は長く居住していたにもかかわらず、外国人でしかなく、様々な規制、差別、迫害の対象であり続けていたが、そのユダヤ人が、フランス革命においてはじめて、平等な「人間」、平等な「市民」の仲間入りを許されたわけである。

確かにこれは画期的な変化であった。フランスのユダヤ人はこれ以後19世紀を通じて、「同化」に努めることになる。共和制フランスは、政治や司法、教育という公的領域に宗教を関与させないという、ライシテを原則とする。宗教に関しては、もちろん信仰の自由は認められるが、それは私的領域に限定される。同化ユダヤ人は、フランス共和制の設定する、こうした公的空間と私的空間の二分界に適合する過程において、他の多くの人がカトリック教を信仰するフランス人であるのと類比的な形で、ユダヤ教を信仰するフランス人になろうとしたのである。そして、そういう新しい自分たちを「イスラエリット」と呼んだ。だから、イスラエリットとはユダヤ人差異を外部には表出しない人たちで、外では人間、内ではユダヤ人 というのが生きる定式になった。言い方を換えれば、「人間」の背後に、ユダヤ人であることを隠す行き方である。

#### 4 東ヨーロッパからの移民のつくる街

こうして、革命の震源地、新しい共和制フランスの中心地パリには多くのユダヤ人が移り住んでくることになる。まず、アルザス・ロレーヌのユダヤ人がこの地区に移住する。そして、すでに見た歴史案内板が示していたように、19世紀の末からは東ヨーロッパからの移住者を多数受け入れるようになる。<sup>5)</sup>

その歴史案内板にも「イディッシュ語」というのが見えていたが、これは東ヨーロッパのユダヤ人が使っていた言葉である。彼らはほとんどの場合フランス語を知っていてフランスに来たわけではない。それは、19世紀末から最も多くのユダヤ移民を受け入れたアメリカ合衆国に行く場合も同様で、移民は行





く先の言語を話せないのが普通である。従って、出身地の言語は、新しい社会に溶け込んでからも移民には不可欠で、新聞や雑誌がイディッシュ語で刊行されたし、ロジエ通り界限にはイディッシュ語図書館やユダヤ人労働者劇場（1902年創立）などもあって、パリにおける「イディッシュ文化の中枢」となった。

（前頁図は 1910 年代のロジエ通り。 *Images de la mémoire juive* 61）

すでに見たレストラン「ジョー・ゴールドンベール」のメニューの中心は東欧料理であったが、前身の食料品店をロジエ通りに開いたナウム・ゴールドンベールはロシアからの移民で、1920 年にパリにやって来た。第二次大戦後、子供たちがレストランを開いたのである。今ではシナゴグ以上に、この界限の象徴的存在になっている。<sup>6)</sup>

もちろん案内板も示すような流入人口を、狭いロジエ通り界限だけで吸収しえたわけではない。1880 年から第二次大戦の前夜まで、ほぼ 60 年の間に、11 万人のイディッシュ語話者がフランスに来て、その大半はパリに定着したが、ロジエ通り地区の他、サンチエ、モンマルトル、ベルヴィルなど、パリの北東部へと広がっていった（Benain 111-112）。しかし、その後も「プレッツルはパリにおけるユダイズムの核心」（Burstein-Finer 211）であり続けた。

それにしても、どうしてたくさんのユダヤ人が、生まれた土地を離れたのであろうか。たった一つの原因だけではとても説明できない。その主なものは、ふつうロシア語で「ポグロム」と呼ばれるユダヤ人迫害である。東ヨーロッパでも、すでに述べたような西ヨーロッパの場合と同様、宗教上の理由からユダヤ人は差別され、迫害されてきた。西ヨーロッパでユダヤ人の社会的条件・生活条件がよくなり、アメリカが国力をつけ、また、産業革命後、交通手段が飛躍的に発達してくると、東欧のユダヤ人は、貧しさと迫害を逃れ、そして、ヴェルコールが、ブダペスト出身の自分の父について述べたように、「正義と自由の国」、「ユゴの国」で生きるために、生まれた土地を離れたのである（Vercors 139）。

しかし、移民たちの到着した現実のフランスは、革命の掲げた理想とはもちろん異なっていた。そこではユダヤ人同胞さえ必ずしも好意的ではなかった。フランスに古くから住んできたユダヤ人は同化し社会的にかなり上昇していた。富裕なイスラエリットの中には東欧ユダヤ移民を嫌い、拒否する人も少なくなかったのである。ロジェ・イコールによれば、ブルジョワ化したイスラエリットとつましい手工業者東欧移民の間では、少なくとも移民第一世代の頃までは、

ほとんど相互に行き来しなかったという (Ikor, *Peut-on être juif aujourd'hui?* 158-159)。

しかし、ロジエ通りの界隈には別なムードがあった。東欧からパリの東駅に着いたユダヤ移民の行く先は、まずロジエ通りであった。住民の一人はこう振り返っている。



現在は刃物店のあるところに、ロンドン・ホテルがありました。すべての移民はここに降り立ちました。1914年の戦争後、私の祖母は、ロジエ通りで、そのホテルの向いに食料品店を開いていました(…)。移民たちは、何ももたず、完全に無一物でやってきました。シャツ一枚だけ

着て、小さな包みをもっていました。祖母の店の奥では、いつも温かいスープが火にかけられていて、到着したばかりの移民に、最初の三、四日、祖母はスープをあげていました。(Brody 108・上図は、1851年にできた、ロジエ通り最初のユダヤ人パン屋。Images de la mémoire juive 116)

先ほどのパリ市の歴史案内板にも書かれていたロジェ・イコールの『混ざった水』は、1955年ゴンクール賞をとった小説であるが、19世紀末のロシアから、不法に国境を越えてパリにやってきたユダヤ人ヤンケルの家族を中心にした長編小説である。ヤンケルがはじめに生活の拠点を置いたのはこの界隈である。

「仕事からの帰り、エクップ通りの前に戻るたびに、彼は不快で鼻にしわを寄せた。ああ、なんて狭くて、汚くて、うるさいんだ！その上、吐きそうになる！そこらじゅうに残っているゴミ、側溝の中を転げまわる渾垂れ小僧たち(…)」(Ikor, *Les fils d'Avrom* 210)。<sup>7)</sup>

移民の子供たちは、フランス語などまったくわからずに小学校に通いはじめる。その小学校は、ロジエ通りから北に上がる短い通り、オスピタリエール・サン・ジェルヴェ通りにあるが、三、四ヵ月もすると、そういう子供がクラスで一番できるようになっている。一方親たちは、ミシンにかじりついて「ロバのように」働き続ける (Brody 123)。「ユダヤ人職業」とあだ名されるほど、多

くのユダヤ人が服飾関係の下働きの職人として働いていた。<sup>8)</sup>

こうしてユダヤ移民は、親も子も、フランスへの同化に努め、社会的、経済的成功をおさめる人たちも出てくる。受け入れてくれたフランスに限りない感謝の念を抱く人も稀ではない。1992 年ノーベル物理学賞を受賞したジョルジュ・シャルパック(1922 年ポーランドの生まれ)は、1931 年にフランスに来て、パリ 20 区のベルヴィルにいる母方の親戚の元に身を寄せたが、後にこう振り返っている。

私は他の多くの移民の子供たちと同様、フランス語を学んだのは共和国の学校です。今日私は第三共和制下の小学校教師たちに敬意を捧げたい気持ちでいっぱいです。彼らこそ、「非宗教、無料、義務」の学校という理想に献身し、フランス社会への私たちの同化を可能にし、私たちが「自由、平等、友愛」という銘を愛するようにしてくれたからです。(Images de la mémoire juive 11)

第一次世界大戦と第二次世界大戦に際しては、この新しい祖国のために戦おうと、非常に多くのユダヤ移民が外人部隊に志願することになる。

## 5 ショアー、そして同化主義からの離陸

しかしこうして、フランス革命の掲げた、自由で平等な「人間」の仲間入りに励んだユダヤ人を待ち受けていたのは何であろうか。またしても差別であり、拒否であり、しかもはるかに大規模な迫害であった。すなわち、ショアーである。ジョー・ゴールドンベールの父も母もアウシュヴィッツから戻ることはなかった([www.tempo.fr/ruedesrosiers](http://www.tempo.fr/ruedesrosiers))。先ほどの小学校に行ってみよう。正面の壁には次のようなプレートが掲げられている。



第二次世界大戦中ドイツへと連行された 165 人のユダヤの子供たちは、ナチの強制収容所で皆殺害された。忘れないで下さい。

1942年7月16日、パリとその郊外に住む22,000人のユダヤ人の一斉逮捕を狙ったヴェル・ディーヴの一斉検挙（実際に捕まったのは、13,000人）の際、この小学校でも165人の生徒のほか先生たちも逮捕されて、絶滅収容所へ送られた（Brody 54）。

一世紀半の同化過程の果てに起こったことが、未曾有の迫害であった。もはや、ユダヤ人性をできるだけ目立たないようにした同化路線も確実な指針ではありえない。とりわけ戦後世代にとってはそうであった。フランス社会の中で地道にいくら努力しても、また追われ殺害されてしまうかもしれない。ショアー後世代の生の軌跡はまっすぐではありえない。この世代を象徴するのが、ピエール・ゴールドマンであろう。

彼の両親はポーランド移民であり、ショアー期には対独レジスタンスに従事したが、ポーランドに残った家族はほとんど皆殺害されてしまった。ピエールは1944年占領下のリヨンに生まれている。高校を三回も退学となり、徴兵を忌避して官憲に追われ、ベネズエラで武装ゲリラに加わり、帰国後はパリで強盗をはたらく。そして、このロジエ通り近くの薬局店に押し入り、殺人を犯した罪で無期懲役の判決を受け、再審により無罪となったものの、六年半もの間、牢に閉じ込められた。しかも出獄後、パリの街頭で射殺されてしまう。ピエール・ゴールドマンの生と死はこのようにめちゃくちゃである。しかしどうしてこうなってしまったのか。逮捕後一年ほど経った1971年6月、ウラディミール・ラビに宛てた手紙の中で、獄中からこう書いている。

決して返済されない血の負債があります。大部分の人が、ユダヤ人が虐殺されたことを知り、それでいてノーマルに生きて行けるという単なる事実。私には、それを知った時、ノーマルに生きることが - 絶対に - 文字通り不可能になりました。存在する楽しみから私は永遠に切れてしまったのです。私は狂人でしょうか、それともユダヤ人でしょうか。（Rabi «Pierre Goldman en prison» 614）

ショアーの「血の負債」を全面的に背負わされて、戦後のフランス社会が築こうとした「ノーマル」な生からははずれてしまったのである。

戦後のフランスに生まれたユダヤ人は、言語、生活習慣、教育など実際にはほとんどの面で非ユダヤ人と違いはないが、ショアーという、多数派社会から受けた絶対的拒否の経験を自分たちのユダヤ人性の基礎に据えて、ユダヤ人と



いうことを隠さずに生きて行こうとした。言い換えれば、戦前の同化にかわる、異化ないし差異主義である。イスラエリットの、ユダヤ人的なものをできるだけ目立たせないようにしようという行き方を拒否し、またそのイスラエリットという呼び名それ自体さえ拒否し、私はジュイフ(ユダヤ人)だと公言したのである。<sup>9)</sup>

## 6 北アフリカとのつながり

半数以上の住民を殺害されたロジエ通りに新たな活力を注ぎ込んだのは、やはり移民であった。しかし今度は東欧からの移民ではない。1950年代、60年代、チュニジア、モロッコ、アルジェリアの独立に伴い、そこにいたユダヤ系住民が多数本土にやって来た。フランスのユダヤ人全体としても、この北アフリカ系ユダヤ人が多数派を占めるに至り、ユダヤ人コミュニティやユダヤ教のあり方にも新たな展開を生じさせた。<sup>10)</sup>

さきに見た歴史案内板は、この界限を東ヨーロッパとだけつなげていたが、そこに名前も挙がっていた作家ロジェ・イコールは、1967年「今日、ロジエ通りは北アフリカである」と書いている (Ikora, *Peut-on être juif aujourd'hui?* 165)。ロシア・ポーランド系の料理を



出す「ジョー・ゴールデンベール」のすぐ近くには、店の構えは貧弱であるがファラフェルなどの北アフリカ料理を出す店がいくつもあって、客を集めている。フランス人かユダヤ人か、イスラエリットかジュイフかという選択肢に加えて、もう一つ、北アフリカのセファラディムか、東欧のアシュケナジムか、という対立軸が際立ってくる。この対立は、イスラエル国家のユダヤ人内部における政治的、社会的上下関係としてしばしば言及されるが、<sup>11)</sup> ディアスポラで最大のセファラディム人口を抱えることになったフランスでも、ユダヤ人社会の指導権争いさえ生じるまでになった。「全く別の文化」(Brody 119)とも評される両者は生活の細部まで違う。セファラディムは屋外で過ごし、海になじみ、大きな声で話す。アシュケナジムは、小声で話し、目立たないように生きるように教えられてきた。とりわけショアーのトラウマの中にいた。アシュケナジムはアシュケナジムの人のやっている店へ、セファラディムはセファラデ

ィムの店へ行く。しかも、できる限り出身地が近いところへ行く。モロッコ出身の老人が、ポーランド系のやっていた食料品店を買い取った。商売のやり方は何も変えなかったのに、次第次第にアシュケナジムの客が減っていったという (Brody 60)。かつてアルザス系ユダヤ人に排除されてきたポーランド系移民はすでにこの地区で力をつけ、北アフリカからの新参者を嫌ったのである (Brody 119-120)。

しかし、こういう対立も次第に和らぎ、かつて東欧出身者がこの界隈をシュテトル shtetl だと感じたように、北アフリカ出身者もメラ mellah だと感じるようになる。<sup>12)</sup> 時代、世代、出身地の違いを超えて、多くの人がこの界隈に、みんなが知り合いで、互いに助け合う「村」のあたたかさを感じてきたのである (Brody 112-114)。

## 7 小説の中のロジエ通り

以上見てきたように、ユダヤ人の商店や宗教施設が多数存在し、またユダヤ人の記憶が色濃く織り込まれた、ロジエ通り界隈は、ユダヤ人と非ユダヤ人双方から、小説や映画にしばしば取り上げられてきた。

すでに述べたように、固有の意味ではパリにゲッターは存在したことはない。しかしこの言葉が、ここを見る視線に強い影響を与えている。そのことを、ロジェ・イコールの長編と同じく 1950 年代に出たレオ・マレの『逆襲ロジエ通り』はよく教えてくれる。この小説は、私立探偵ネストール・ビュルマを主人公にした『パリの新しい謎』というシリーズの一巻をなし、中心舞台となっているのはロジエ通りである。

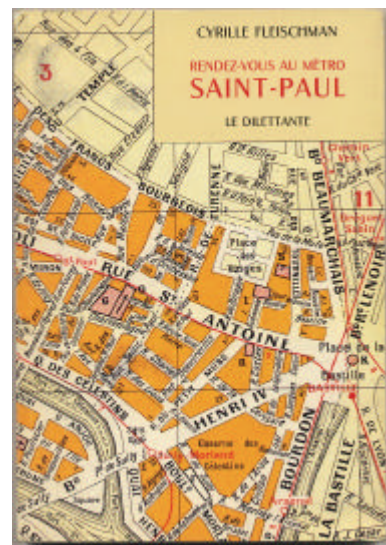
子供たちの陽気な騒ぎや、向こうの歩道と外国語でやりとりするごく普通の男たちにもかかわらず、ここの支配的な雰囲気はむしろ、祖先から続く宿命であろう。それはおそらく、ここを、私の考えでは不適切と思われるが、ゲッターと呼ぶところから来ていよう。ゲッター！まさに開けたゲッター。ここからは飛び立っていくことも簡単である。象徴？すぐ近くの地下鉄聖パウロ駅から、八駅でシャンゼリゼに着いている。(Malet 145)

「開けたゲッター」とはもはやゲッターではあるまい。この方向にフィクションを組み立てて行けば、のちにドミニク・ザルディが言うような、温かみ

のある「優しきゲッター」(Zardi 13) も描けたであろう。<sup>13)</sup> しかし、マレがこの界限に展開させたストーリーは、現実には即していないと判断された、ゲッターという言葉の喚起する、「祖先から続く宿命」というイメージを中核にしている。抜けることのできないような、暗さ、狭さ、貧困、迫害、不信・・・「私は敵意の視線を受けて表に出た。(・・・) こうした視線を私は、ゲッターに着いたときからずっと、行く先々至るところで、肩に感じていた。敵意、と言うのは言いすぎであろう。それはただ単に、長い間パーリアとして扱われ、いつかまたそうならないのかどうかも知らず、自分の人種ではない一切を不信に思う人たちの視線にすぎない。彼らを恨むことなどできない」(Malet 147-148)。マレが外側から入り込んだ人の眼で描き出すロジエ通りには、息苦しいまでに出口がない。ほっとできるのはただ一箇所、当時存在した聖パウロ映画館に、ロジエ通りの帽子職人のところで働く若いユダヤ女性が仕事を終えて入って行く場面くらいである。

マレの『逆襲ロジエ通り』の新しさは - 確かに新しいところを狙っていると思うが - 、1950年代の時点で、ユダヤ人の中のコラボ(対独協力者)という像をはっきり見せた点であろう。非ユダヤ人の責任追及が終わらぬ時期に、マレはユダヤ人の悪党を描き、ロジエ通りの住人たちは金に眼がくらんでか、脅されてか、それとも家族の絆にしばられてか、いずれにしてもその共犯者になってしまう。ロジエ通りはここでも無気力とさえ言える。動かぬ闇のようである。ナチから逃れるために秘密の隠れ家を作って、それでもうまく逃げ延びることはできなかった。その隠れ家を、戦後、ユダヤ人コラボであり、イスラエルの同胞をイギリスに売った男が自分の隠れ家に使う。そうしてこの男も逃げおおせない。ロジエ通りは避難場所を提供しつつも、かくまう人をいつも守れ切れない。自分からは動けず、ただ外側からの働きを受け止める。はがいじめにされるだけのユダヤ人ゲッター。

これに対し、現在、この50年代のロジエ通り界限のユダヤ人たちだけを描こうとする現代作家シリル・フレッシュマンは、ここを別様に描きだす。代表作は1990年代に発表された一連の『地下鉄聖パウロ駅での待ち合わせ』である。



表紙にはそのものズバリ、ロジエ通り界隈の地図が使われている。

この短編集に出てくるユダヤ人は、ロスチャイルドのような大金融家でも、アインシュタインのような大学者でも、またシャガールのような大芸術家でもない。フレッシュマンの描き出すのは、東欧から移り住んできたか、そういう東欧移民を両親にもつ、ロジエ通り界隈の住民である。たいていはショアーの犠牲者を家族の中にもっている。ロジエ通りをタイトルに入れた小説が最近書かれることが多いが、例えばミシェル・カーンの『ロジエ通りの乞食』(Kahn) もジャック・ランズマンの『ロジエ通り』(Lanzmann) も、主題となっているのはショアーの記憶である。フレッシュマンにおいても確かに登場人物はショアーを乗り越えたことがわかる。しかしショアーの犠牲者としての過去は数行で言及されるだけで、背景に置かれる。そればかりではない。東欧からの国境越えの困難も、パリの生活への適応の苦しさも、この界隈のユダヤ人の深い奥行きを形成しているが、小説が描こうとするのはあくまでも戦後ある程度の時間を経た時点でのロジエ通り界隈の日常である。この界隈の店で働き、この界隈のシナゴグに集い、時にイディッシュ語も使う人たちの小さな生活である。彼らはこの界隈で亡くなり、パリのすぐ南にあるバニューの墓地に葬られ、亡くなった後も時々靈魂としてこの界隈に戻って、子供たちや近所の人たちの様子を窺っている。

平凡な日常を描いて読者を引き付けるのはとても難しい。ユダヤ人特有の宗教的儀式や慣習、つまり他とは異なるユダヤ的時間と空間に訴えたとしたら、ちょうど横浜の中華街や長崎のハウステンボスのように、異国情緒で引き付けることもできるであろう。しかしそれはフレッシュマンのとる方法ではない。確かに彼の主人公たちはシナゴグに行ったり、イディッシュ語を使ったりするのであるが、それは背景の細部にすぎない。物語の中心に位置するのは、店のストックがはけないで悩み、借金の返済に困る人々、またユダヤ人は組織や団体を作るのが好きで同業者団体、同郷者団体などいくつも作るわけであるが、その組織の役員になれないで悶々としている、そういう人々である。要するに、パリのほかの地区の人たちや私たちとも、さほど変わらない日常を送っている。特別、ユダヤ人、ユダヤ文化、ユダヤ教などとは言い立てず、かと言って、ユダヤ人であることを卑下して隠すようなこともせず、パリの一隅で平凡な日常を営んでいる。そういう日常の中にある、愉快的なもの、真面目なもの、偉大なものをフレッシュマンは取り出してくるのである。



本稿のはじめから、ロジエ通り界限では、パリの町並み風景の中に、ユダヤ的なものがこれ見よがしではなく、控えめに表出されている、と繰り返し述べてきたが、その印象は、フレッシュマンの短編を読んだときに受ける印象とまさに一致するものである。ロジエ通り界限を小説の設定として使っているからというよりはむしろ、パリの中にユダヤ的なものを肩肘張らずに溶け込ませているそのやり方の点で、フレッシュマンの小説は、ロジエ通りを最もよく表現しているように思う。同化の命ずる「人間」の道をとるか、それともユダヤ人差異を強調する道をとるか、という二者択一ではなく、ユダヤ人のままで人間である方向がありうることを、フレッシュマンの小説を読んでも、ロジエ通りを訪れても、私たちは感じ取ることができるように思う。

## 結び

パリのロジエ通り界限、そこには確実にユダヤ的差異が浸透している。しかしその浸透過程は、パリやフランスという限られた空間において、数年、数十年という単位で測定できるような事態ではない。ヨーロッパ、ロシア、地中海世界を巡るユダヤ人の何世紀にもわたる歴史が、パリのこの一角に滲出しているのである。

そして、この滲出は今もまた新たな形で持続している。パレスチナにおける2000年9月からの第二次インティファダ以降、西アジアの紛争はフランス社会に意外な形で波及して、反ユダヤ主義の高まりが政治的課題としても取り上げられるまでになっているが、そうした中、ロジエ通りには、パリの他の地区や郊外からユダヤ系の若者たちが大挙してやってきて、「イスラエルは勝つ！」とシュプレヒコールを繰り返している (Askolovith)。長く波乱に満ちた歴史の果てにパリにおけるユダヤ性の象徴となったロジエ通りは、こうしてまた新たな要素を消化して、いっそうその象徴性を高めてゆくのであろう。

## 注

- 1) この界限ではじめて舗石が敷かれたのがこの通りで、そこから「舗石通り」Rue Pavée という名前がつけられたという (www.tempo.fr/ruedesrosiers)。
- 2) このテロ攻撃はロジエ通りのユダヤ人に非常に大きなショックを与えた。ドミニック・ザルディのエッセイ『ロジエ通り』に、この事件への詳しい言及がある (Zardi 41-48 etc.)。
- 3) この界限全体を指すのにしばしば使われるこの「プレツル」という言葉は、すでに見た「ユダヤ人広場」というかつてのフランス名に由来するようである (cf. *Images de la mémoire juive* 50)。
- 4) この演説を含め、フランス革命の時期に関しては、主にエステール・ベンバッサの著作を参照した (Benbassa 130-133)。
- 5) この地区にユダヤ人が集住するようになったのはいつ、どのようにしてなのかははっきりしていない。ジャーナリストとして世界的に知られた、プラハ出身のエゴン・エルヴィン・キッシュによれば、フランス革命により貴族たちが放擲したこの界限に、まず貧窮者が入り込み、こうして治安は悪くなったが安価にもなったこの地区に、東欧ユダヤ移民が住み始めたという (Kisch 67-68)。
- 6) 東欧ユダヤ移民およびショアーの犠牲者としてのこの家族の歴史が、レストランのメニューの最初に印刷されている。
- 7) イコール自身はマレ地区に生まれ育ってはいない。親戚の何人かがここに住んでいて、あくまで「外側からしか」知らないという。その親戚はあまりフランス語ができなかったが、イディッシュ語の通じるこの界限に住み続けたことがフランス語の上達を阻んだようである。イコールの両親はともにフランス語をよくものにしていて。生後6ヵ月でフランスに来た母にはフランス語が母語で、18、19歳の頃来た父にも、ほぼ母語のようであったという。父方の祖父母はロシアにとどまって、第一次世界大戦の終わりに亡くなった (Ikor, *Peut-on être juif aujourd'hui?* 175)。
- 8) 1911年、30,000人のユダヤ人就業人口のうち、既製服製造業に7,000人、帽子製造業に2,000人、毛皮服製造業と靴製造業にそれぞれ1,500人、皮革製品業に500人が従事していた (*Images de la mémoire juive* 117)。
- 9) 戦後世代のこのようなユダヤ人アイデンティティについては、アラン・フィンキェルクロートが『想像のユダヤ人』の中で精緻に証言、分析している。この点について、及びピエール・ゴールドマンについては、拙稿を参照していただきたい (田所)。
- 10) すでに多くの研究が明らかにしているように、この北アフリカのユダヤ人の移住は、ショアーのインパクト、およびイスラエル国家の建国とその後の紛争と並んで、

フランスの戦後ユダヤ人のアイデンティティを構成する決定的な条件を構成している。

- 11) アラン・フィンキェルクロートによると、それまではユダヤ通にしか知られていなかったこの種の特別な用語が、イスラエル国家の内部に存在する「差別」を示す形で、1960年代の半ば、「西欧の政治的語彙の中に入った」という (Finkelkraut 172)。
- 12) シュテトルは東ヨーロッパにおけるユダヤ人居住地を、メラはモロッコの都市のユダヤ人地区を指す言葉である。
- 13) この界限のユダヤ人自身も現在ふつうにゲッターと言っているが、ザルディはその意味合いを次のように説明している。「ゲッター、それはパリのマレ地区の、愛情のこもった形容語であり、選りすぐりのイメージを回転させる万華鏡である」(Zardi 96)。

## 参考文献

- Askolovitch, Claude. «Le ghetto dans la tête», *Le Nouvel Observateur*, n°1931, 8-14 novembre 2001.
- Benain, Aline. «Les quartiers juifs à Paris du début du siècle à l'Occupation», Becker, Jean-Jacques, et Annette Wieviorka (dir.), *Les Juifs de France*, Liana Levi, 1998.
- Benbassa, Esther. *Histoire des Juifs de France*, Seuil, 2000.
- Bismuth-Jarrassé, Colette et Dominique Jarrassé. «Fragments d'un quartier juif», *Le Marais mythe et réalité*, Picard, 1987.
- Brody, Jeanne. *Rue des Rosiers : une manière d'être juif*, Autrement, 1995.
- Burstein-Finer, Jacques. *Paris, terre d'esoir*, traduit du yiddish par Esther et Joseph Fridman, Le Sycomore, 1979.
- Fargue, Léon-Paul. *Le piéton de Paris*, 1939, Gallimard, 2002.
- Finkelkraut, Alain. *Le Juif imaginaire*, Seuil, 1980.
- Fleischman, Cyrille. *Rendez-vous au métro Saint-Paul*, Le Dilettante, 1994.
- Hyman, Paula. *De Dreyfus à Vichy*, traduit de l'anglais par Sabine Boulougue, Fayard, 1985.
- Ikor, Roger. *Les fils d'Avrom*, Albin Michel, 1955.
- id. *Peut-on être juif aujourd'hui?* Grasset, 1968.
- Images de la mémoire juive. Immigration et intégration en France depuis 1880*, Liana Levy, 1994.
- Kahn, Michèle. *Le Shnorrrer de la rue des Rosiers*, Bibliophane, 2000.
- Kisch, Egon Erwin. *Comment j'ai appris que Redl était un espion*, traduit de l'allemand par

- Danièle Renon et Alain Brossat, Cent Pages, 1990.
- Lanzmann, Jacques. *Rue des Rosiers*, Rocher, 2002.
- Malet, Léo. *Du rébecca rue des Rosiers*, 1957, Fleuve Noir, 1999.
- Michelin. *Paris*, 6<sup>e</sup> édition, Pneu Michelin, 1986.
- Philippe, Béatrice. *Être juif dans la société française*, Complexe, 1997.
- Rabi, Wladimir. «Pierre Goldman en prison», *Les Temps Modernes*, n°411, 1980.
- Vercors. «Quatre-vingt-treize», *Europe*, n°74-75, février-mars 1952.
- Zardi, Dominique. *Rue des Rosiers*, Dualpha, 2002.
- 田所光男「ショアー後のフランスに生きる東欧ユダヤ移民のアイデンティティ - 革命家ピエール・ゴールドマンと歌手ジャン＝ジャック・ゴールドマン」、『敍説』第II巻第3号、花書院、2002年1月。
- ドリュモー、ジャン『恐怖心の歴史』、評論社、永見文雄・西澤文昭訳、1997年。